



Title	「を」の気脈：『源氏物語』の句読と異同
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	語文. 2004, 80-81, p. 33-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69023
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「を」の氣脈

——『源氏物語』の句読と異同——

加藤 昌嘉

『源氏物語』の或る一本に拠りその忠実な現代語訳を試みていると、どこで句読を切りどこに鉤括弧を付すべきか、いわばその文構造をどう捉えたらよいのか、判断に窮ることがままある。汗牛充棟の研究書を繙いてもそうした疑問が氷解することは稀なので、なおさらその違和に眩惑され魅了され、平安和文の氣脈を何とか理会したいという思いに駆られることがある。萩原広道が「語の脉」^{〔アバタ〕}「弓尔乎波の首尾」を視覚化することに努め、佐伯梅友が「どこにかかるか」と問い合わせていたのを見るにつけ、「源氏物語」を読むとは、そういう営為であったのだと改めて感得されもする。

一 「思つきせぬ事どもを」

例えば、次の文章は、如何なる氣脈を成してあるか。

【A】中宮の御方に参りたまへれば、人々めづらしがり見たてまつる。命婦の君して、「思ひ尽きせぬことどもを、ほど経るにつけてもいかに」と御消息聞こえたまへり。

葵上を喪い忌に籠っていた光源氏は、久々に父桐壺院の御前に参

り、続いて藤壺中宮のもとを訪れる。傍線部は、王命婦を介して光源氏に伝えられた藤壺の言で、新編日本古典文学全集は、「この私も悲しみの尽きぬ思いの数々ですが、時がたつにつけてもどれほどにかお寂しく」と訳出している。なぜ、「を」が「ですが、」に変換されるのか、首を傾げざるを得ない。「ことども」という体言に接続しているのだから、まずは格助詞と認め、「いかに」以下に「かなしうおぼすらむ」「さびしからまし」「わびしからむ」といった述語用言が想定されるのだから、「物思いの尽きない諸々の悲傷事を、月日を経るにつけ、どんなにか辛くお感じになっておいででしょう」と訳すべきではないのか。この直前でも、朝顔齋院が「秋霧に立ちおくれぬと聞きしよりしうる空もいがとぞ思ふ」という歌を贈り、女房が「言ふかひなき御事は、ただかきくらす心地しはべるは」と述べていたのと同様、藤壺も、葵上を「くした光源氏に、弔慰の言葉をかけたに過ぎないのではないのか。

実はこのくだりは、昭和の或る時期までは、「尽きせぬ御愁傷^{〔アバタ〕}」と訳されていていた。

（新編日本古典文学全集「葵」卷六七頁）

いといふことで、日本古典文学大系や『全积源氏物語』あたりから、「思ひ尽きせぬことども」は光源氏でなく藤壺自身の愁嘆を指すと解するようになつたのである。当然、文脈が捻れるが、例えば日本古典文学大系は「事どもを。」と句点を打ち、角川文庫は「今も悲しく存じますことですもの。」と訳すなど、「を」を詠嘆の終助詞の「ことくに處理している。しかし、なぜ藤壺がそこまで葵上の死を悲しむのか、やはり判然としない。或いは、「ども」に、密通をめぐる苦悶まで籠められているというのだろうか。「御」がないことを重視するあまり、これが浮き上つてしまうように思われる。

では、次のような本文であったら、どうか。

【B】中宮の御かたにもまいり給へれば、人／＼めづらしがりみたてまつる。みやうぶのきみして、「おもひつきせぬ御事を、ほどぶるにつけても、いかに」と、御しようそくきこへ給へり。
(各筆本「葵」卷五四ウ)

【C】中宮の御かたにもまいり給へれば、人／＼めづらしがりみたてまつる。命婦の君して、「おもひつきせぬ御事、ほどのふるにつけても、いかに」と、御せうそこきこへ給へり。

(陽明本「葵」卷五七ウ)

大系は、『青表紙本』以外の諸本を用いては底本を改訂しないといふ方針を貫いている。なるほど、それなら、いっそのこと、次のような処理をすればよかつたのではないか。

【D】中宮の御かたにまいり給へれば、人／＼めづらしがり見たてまつる。命婦の君して、思つきせぬ事どもを、「ほどぶるにつけても、いかに」と、御せうそこきこえ給へり。

(大島本「葵」卷四八ウ)

右のごとく、「思つきせぬ事どもを」を鉤括弧の外に出し、「ほどぶる」から「いかに」までを藤壺の言のとすれば、「を」は「きこえ給へり」に掛かってゆく格助詞となり、「御」の有無を云々する必要がなくなる。この場合、「事どもを」の後にもう一つ「御せうそこ」という目的語が存することになるが、「を」は「くについて・くに対し」という掛かり方をするものと見ればよかる。『古典の本文は、その誤謬が明証されないかぎり、異文によって改変すべきではな」く、「所与の本文は、それ自体として、徹底的に考究されるべきであろう」ということである。

二 「所せき身のほどを」「みすてがたきはまのさまを」

【B】各筆本(御物本)は「御事を」としているので問題は解消する。また、【C】陽明本には「御」があり「を」がないので、「御事」は体言止め、もしくは無助詞の目的語として「いかに」以下に掛かることとなり、やはり問題は解消する。にもかかわらず、諸注釈書がこれらを参照して「御」を補わないのは、各筆本・陽明本の「葵」卷は『別本』であり、他にかような本文を持つものが見出せないからだろう。とりわけ新編日本古典文学全集と新日本古典文学

近藤泰弘「上代語における助詞「を」の分類」および「接続助詞「を」の発生時期」は、意味・解釈の問題をひとまず括弧に入れ、形態・構文の面から「を」を分類する点、周到にして明瞭であり、この助詞を考える際の指標となるべき論稿と曰われる。その論旨を、以下に要約しておく。

◆上代文献における「を」

【1】格助詞「対応する述語用言があり、目的語となつてゐる体言

(準体等を含む) を承けているもの。」

【2】終助詞 「対応する述語用言が存在せず、単独で体言・連体形等を承けているもの。」

【3】間投助詞 「広義の連用に続き、文末が意志・命令・願望など特殊なムードになるもの。和歌に用いられる。」

◆中古文献における「を」

【1】格助詞

【2】接続助詞 「上代で終助詞と呼んだもの。体言十を、連体形十を、連体形十もの十を、という環境に現れる。」

【3】間投助詞

特徴的なのは、間投助詞を連用成分の直後に現れるものだけに限定した点、および、上代で終助詞と呼んだものと中古に現れる新しい形のものを併せて接続助詞とした点である。この区分を筆跡とすると、論点は格助詞なのか接続助詞なのか、すなわち、「を」に、対応する述語用言があるか否かの識別に絞られて来るだろう。そして、その判断こそが最も難しい。

例えば、次の「を」は、どう捉えるべきだろうか。

【E】たとへなくどのにおぼしをきてゝ、「まちどをなりと思らむ」と心ぐるしうのみ思やりたまひながら、所せき身のほどを、さるべきついでなくて、かやしくかよひ給べきみちならねば、神のいさむるよりも、わりなし。

(明融本「浮舟」巻二二二～二二三)

浮舟を宇治の邸に囲いながらも、思うように逢えぬ薫の心情を表したくだり。傍線部の「を」を、諸注釈書は「～ので」「～から」「～ことと」と訳しているが、疑問である。「所せき身のほどを」

は、末の「わりなし」と対応していよう。「を」は、格助詞と認むべきものである。形容詞・形容動詞が格助詞「を」を承ける述語用言たり得ることは認知されていないのかも知れぬが、ここでいえば、窮屈な身分を「わりなしと思す」「わりなく思す」と取るのである。

例えば『角川古語大辞典』の「を」の項などを参照されたい。平安和文にあっては、「いはけなくおぼゆ」ではなく「いはけなし」、「さがなくおはして」ではなく「さがなくて」、「惜しげに見え給ふ」ではなく「惜しげなり」と表現される、と説いていた今泉忠義の論稿⁽⁸⁾が想起されるところである。

或いはまた、次の「を」は、どう捉えるべきだろうか。

【F】わかき人～の、いぶせう思ひしづみつるは、うれしきものから、みすてがたきはまのさまを、またはえしもかへらじかしと、よするなみにそへて、そでぬれがちなり。

(大島本「松風」巻七〇～七一)

明石御方と姫君が光源氏に引き取られる仕儀となり、それに伴つて明石を離れることになる若い女房たちが、悲喜交々の思いを抱く場面。文脈を見やすくするために、鉤括弧を付してみたい。「うれしきものから」は、「そでぬれがちなり」と逆接の関係になるので地の文と判断できる。が、「みすてがたきはまのさまを」はどう処理すべきか。佐伯梅友は、「みすてがたき」から「かへらじかし」までを鉤括弧に入れ、「さまを。」と句点を打つて、「この場合の「を」は詠嘆の終助詞であって、格助詞ではない」という。⁽⁹⁾しかし、先の【D】のことく、この「を」は「～に対して・～を見て」という形で末句に掛かっているとは考えられないだろうか。「そでぬれがちなり」は、一種の形容動詞のことく、述語用言に相当する役

割を担っているとはいえないだろうか。よって、「またはえしもかへらじかし」のみを鉤括弧に入れるのが穩當と思われる。

体言接続の「を」が、心内文や会話文を跨いで、述語用言らしき句に掛かる文型は、『うつほ物語』にも見出すことができる。

【G】ともかくもいはれず、よはりたるけしきを、「今は、また、いなどのかたまふとも、御心にまかすべきにもあらず」と、たゞいそがしにいそがして、きぬとり出てきせて、そゝのかし給へば、あれにもあらずながら、出たつ。

（『俊景本宇津保物語の研究』）〔俊蔭〕卷 九四〇（九四四）

うつほに暮す俊蔭の娘と仲忠を見つけ出した兼雅が、二人を京に引き取るべく促している場面である。「よはりたるけしきを」とは俊蔭の娘が逡巡する様をいうが、その「を」は、決して接続助詞でも終助詞でもあるまい。これも、「～に対して」ともいい換え得るような格助詞であり、「いそがして」「そゝのかし給」に掛かっていると判斷される。「～けしきを（見て）」とか「～けしき（の俊蔭の娘）を」とかいう補いをして訳さねばならないが、かような語法もあるのだということは記憶に留めておきたい。

三 「を」の揺動・明滅

それにしても、【E】がもし「身のほどなるを」「身のほどの所せきを」とあつたら、【F】がもし「はまのさまなるを」「はまのさまのみすてがたきを」とあつたら、「を」は、さしたる考慮もなく「～だが」「～ので」と訳されただろうと思われてならない。しかし、そうした異文は存在しないのである。

山口明穂は接続助詞「を」を解説する中で、『万葉集』一五五五

番の「いくかもあらねば」が、『拾遺集』一四一番には「いくかもあらねど」と載り、それが『詠歌大槻』では「いくかもあらぬを」と引かれた例を挙げている。「は（盤）」と「と（登）」は誤写される可能性があり、また、通行の『詠歌大槻』本文では「あらねど」となっているので、再調査を要する指摘ではあるのだけれども、助詞はどのように変容し得るかという視点そのものは興味深い。『源氏物語』諸本の場合、本文の先後関係が不明である分、「を」の異同は、同一平面上の揺れ動きとして捉えられるだろう。

諸注釈書の底本たる大島本・明融本と、『河内本』《別本》と呼ばれる尾州本・高松宮本・保坂本・陽明本などを校合してみると、助詞「を」と交替し得る主なものは、接続助詞の「に」「ば」「ど」、格助詞の「と」「の」、係助詞の「は」「も」、および、「をば」「もの」を「×（無助詞）」であることがわかる。当然のことながら、文意が変らない場合もあれば文意が逆になる場合もあり、また、文脈そのものが別物になる場合もある。ただ、いずれにあっても、文意不明となるものは珍く、各々、解釈可能な本文を伝えていると思しい。それだけに、中世期の『源氏物語』諸本を横断するような国語学的考察が俟たれるところである。以下、その捨て石として、注意すべき「を」の異同を取り挙げてみたい。

【H】なみ／＼の人にもものし給はねば、かたじけなう心ぐるしうて、かう思たちにたるを、おやなど物し給はぬ人なれば、

（大島本「東屋」卷 六〇）

浮舟の母君の発話である。大島本など諸本が「給はねば」とする箇所を、陽明本は「給はぬを」（五ウ）とする。男君が「なみ／＼の人」ではいらっしゃらないということと、母君が「かたじけなう

心ぐるしう」思うこととは因果の関係になるため、「ねば」も「ぬを」も共に「～ので」という順接として働いている、と見る向きもあるが、「給はぬを」は「かたじけなしう心ぐるしう」という形

容詞に掛かってゆくので、「を」は格助詞と考えるのが妥当だろう。また、諸本が「たるを」とする箇所は、陽明本では「たる」とある。ただ、直後に「をや（親）」があるので、連体中止か連体修飾かといふ以前に、「を」か「ゝ」が脱落している可能性もある。

【I】今はかぎりと思し程は、戀しき人おばかりしかど、こと人ゝはさしもおもひいでられず、（大島本「手習」卷一三〇）蘇生後の浮舟の心境を表したくだりである。大島本など諸本が「しかど」とする箇所を、歴博本は「しを」（一六〇）、保坂本は「しをいまは」（一六〇）とする。この場合、「ど」と「を」が同意であるか否かが問題となる。前句では入水を決意した時分のことを、後句では再び生を得た現在のことを述べており、また、「を」が掛かる語用言は、これ以降にも見当らない。よって、この「を」は「ど」と等しく逆接の接続助詞として働いていると見られる。保坂本では「いまは」とあって、対比がより顕著になろう。

【J】まして、ひるよなうおもひ給へまどはれ侍心を、えのどめ侍らねば、人めもいとみだりがはしう、（大島本「葵」卷四四）

葵上を亡くした父左大臣の心内である。大島本など諸本が「心をえのどめ」とする箇所を、陽明本は「心をばのどめ」（五二一）とする。これは、「を」と「をば」の交替というよりも、或る段階で「え（衣・盈）」と「は（者）」との誤写が起つたと考えるべきものだろう。ただ、双方、文脈は通っている。

以上は、異同があつても文意が変らない諸例であったが、一方、「を」の揺動によつて、論理が微妙に異なつて来る場合もある。

【K】宮も、かの人ちかくわたしきこえてんとする程のことども、かたらひきこえ給を、「いとうれしきことにも侍かな。あいなく、みづからあやまちとなん思ふたまへらるゝ。あかぬむかしのなごりを、またたづぬべきかたも侍らねば、おほかたには、なにごとにつけても、心よせきこゆべき人となん思ふたまふるを、もしごなくやおぼしめさるべき」とて、（大島本「早蕨」卷五ウ～六〇）

大君を喪った鬱懃を吐露する薫を前にし、「宮」＝匂宮も、中君を京に移すべき用意のことなどを口にすると、薫が「いとうれしきこと」と、中君に対する心情を語りはじめる、という場面。諸本が「給を」とする箇所を、陽明本は「給に」（六〇）とする。接続助詞「を」と「に」の交替比率は高く、また、ここを「～ので」と訳すか「～と」と訳すかは注釈者の匙加減によろうから、「給を」と「給に」の相違については今は考えない。「いとうれしき」以降から薫の発話になるがゆえに、「給」という終止形ではなく、「を」「に」という主語転換を示す記号が置かれたということである。

問題は、鉤括弧内の文脈である。「いとうれしき」は、中君が京の匂宮邸に引き取られることを喜ばしく思う気持ち、「あいなく～」は、匂宮を手引きした結果、中君が空閨を託つことになつている責任を感じる気持ち、と解せようが、しかし、「あいなく～らるゝ」の処理が難しい。新潮日本古典集成や角川文庫は、これを後

四 「いとうれしき事にもはべるを」

句に續け、「あかぬむかし（故太君）のなごり」を修飾するものと解しているのだけれども、ここには係り結びがあるので、「らるゝ」と句点で切るのがよい。「あいなく」は、「（あなたを前にして）具合が悪くも、（中君の現在の心労は、あなたを紹介した）己の失敗ゆえだと思われるだけに。」というような意で、前文「いとうれしきことにも侍かな」を倒置的に理由説明していると考えられる。保坂本が「られつる」（五ウ）としているのが参考になるが、薰は己の所為を「あやまち」と感じている（た）がゆえに、今、中君が京に迎えられることとなつて嬉しい、という論理である。

一方、陽明本では、本文は、次のようにある。

【L】みやも、かの人ちかくわたりしきこえてんとするほどのこと、もかたらひきこへ給に、「いとうれしき事にもはべるを、あいなくみづからあやまちとのみ思給へらる。おほかたも、あかぬむかしのなごりも、又たづねべきかたもはべらねば、なにごとにつけても心よせきこゆべき人となん思給ふるを、もしりんなくやおぼしめさるべき」とて、

（陽明本「早蕨」卷五ウ～六オ）

この場合、「はべるを」は「思給へらる」という述語用言に掛かってゆくだろう。また、意味上、「らる」と「おほかたにも」の間に句点を打たねばならないだろう。よつて、「洵に嬉しい事であります（中君が京に引き取られる）件を、嫌なことに、自分の失策だとばかり感じてしまう。」と訳せばよいだろうか。「を」は格助詞と曰される。陽明本における薰は、中君が匂宮邸に入居すると、そのことを、「あやまちとのみ」感じる、と述べているようである。匂宮に中君の世話を託すことを悉なく思うという弁である。

とともに、中君が確實に匂宮のものとなつてしまふことを悔やむような気持ちが滲んでよいようか。

五 「うしろめたげなる御けしきを」

或いはまた、「を」のみならず、その前後にも大きな異同がある、通行の解釈とは異なる文脈を成している場合もある。

【M】豪き世にはあらぬところのゆかしくて背く山路に思ひこそ入る、「うしろめたげなる御けしきなるに、このあらぬ所求め給へる、いとうたて心うし」と聞こえ給。

（新日本古典文学大系「横笛」卷五〇頁）

朱雀院から春の山菜を添えて文が贈られて来たのに対し、六条院で出家生活を送る女三宮が、返歌をしたためるくだり。新日本古典文学大系は、「うしろめたげなる」から「心うし」までを光源氏の発言と取り、「気がかりに思つていらつしやる院のご様子なのに、こうして「ちがう所」をお求めになつてゐるとは、えらく嘆かわしい」という訳を付している。「御けしき」は朱雀院の御様子、「に」は接続助詞ということなのだろう。さて、傍線部は、保坂本では「御けしきを」となつており、「源氏物語別本集成」によると、麦生本・阿里莫本には「御けしきに」とある由である。ただ、保坂本にあつては、異同はそれだけに留まらない。

【N】「うきよにはあらぬところのゆかしくてそむくやまちにおもひこそいれ」。「いとゞ世をいかにおぼすなりにけるにか」とうしろめたげなる御けしきを、「このあらぬところもとめたまへる、いとうたて、こゝろうし」ときこえ給。

（保坂本「横笛」卷三ウ～四オ）

保坂本には、波線部のことく、一九字にも及ぶ一節が存在する。

語順が落ち着かないが、「一入、この世を、どんなにか（辛く）お思いなさるようになったことか」と訳してみる。これは、女三宮が歌の末尾に書き添えた朱雀院への一言であろうか、或いは、女三宮の歌を見た光源氏の感想であろうか。いずれにせよ、「とうしろめたげなる御けしきを」は地の文となり、「御けしき」は女三宮の様子ということになる。その場合、「を」は、先に見た『うつほ物語』の例【G】と同じく、「～に対し・～に向かって」という形で「きこえ給」に掛かる格助詞と判断できよう。「と案じられる御様子（の女三宮）に対し」という意である。

しかし、顧みれば、角川文庫は、【M】の本文に基づきながらも、他の注釈書とは異なり、「出家にはむかない御様子なのに」と訳出していたのであった。大島本にあっても、「御けしき」は女三宮の様子と解し得るということである。もしくは、「うしろめたげなる御けしきなるに」を地の文と取るべきだったかも知れない。保坂本の存在によって、通行の解釈が再考を迫られている。

六 「わらば」のわか君を」

或いはまた、「を」そのものは不变でありながら、後句に小さな異同があるため、対応する述語用言が変る場合もある。

【O】君も、「猶かくてはえすぐさじ。かのちかき所に思たちね」とすゝめ給へど、つらき所おほく、心見はてむものこりなき心ちすべきを、「いかにいひてか」などいふやうに思ひみだれたり。「さらば、このわか君をかくてのみはびなき事なり。思心あればかたじけなし。

（大島本「薄雲」卷一オ）

助詞と認むべきものである。

だが、次のようにあると、文の関係を別様に考えねばならない。

【P】「なを、かくてはえあるまじ。京のちかきところえ」などすゝめ給へど、つらきところおほくみはてんも、のこりなきこゝちすべきを、「いかにいひてか」などいふやうにおもひみだる。

「さるはこのわかきみをかくてもみはいとひない事なり。おもふところもあれば、かたじけなし。（天理本「薄雲」卷一オ）

天理本（畊雲本）の本文である。傍線部は、「さるは、この若君を、かくても見ば、いと便ない事なり。」と漢字を宛てることができよう。「そうはいっても、姫君をこんな状態で世話していたら、洵に宜しくない事になる。」と訳せばよろしいか。わずかに「の」と「も」の違いだけで「見ば」という述語用言が出現し、一続きの文として把握できることになる。いずれも格助詞ということに変りはないものの、対応する述語用言が秘されているか顕在しているかによって、句読法が異なって来るわけである。

とはいへ、他の『源氏物語』諸本は皆、「かくてのみは」という

大堰の山荘で寂寥たる日々を過す明石御方は、「君」＝光源氏か

ら一條院東院に移るよう勧められるものの、なおも躊躇している、すると光源氏は、せめて「わか君」＝明石姫君だけでも京に呼び寄せ紫上の養女に迎えたいと、次なる提案をはじめる、という場面。

傍線部に対し、諸注釈書は揃って、「この若君を。」と句点を打つている。『全釈源氏物語』が、「若君を」の下に「移し給へ」などの省略があるものとして解した」と説くように、「さらば、この若君を…。」とでも書記すべきなのだろう。この場合、「さらば」があるので、「を」は、「～だなあ」「～のに」といった詠嘆ではなく、格助詞と認むべきものである。

本文を改変することなく伝えていた。しかも、大島本や尾州本など句読を施す写本では「わか君を」の下には何の点もなく、古注釈でも「を」の下に省略があるとは説かれていない。となると、「わか君を」を後句に続け、「かくてのみ」と「は」の間に「置く」「見る」などの述語用言を補って読まれていたことになるのだろうか。

七 「いとらうたかりし人を」

ここまで、「を」が体言に付いていようと連体形に付いていようと、まずはどこかに掛かる格助詞と捉え、それが認め難い時に限って「のに」という接続助詞と判断する、という基本的立場を崩さず読解を行つて来た。従来、体言に接続していながら「うだが」と訳されて来た「を」も、概ね格助詞として解し得ることがわかつたわけだが、ただ、やはり読解に窮する文脈もあって、とりわけ本文異同がなく、古注釈も問題視していない場合には、拱手を余儀なくされ、平安和文と現代人との如何ともし難い懸隔を痛感する。

【Q】重りかかる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を。思ひもていけば、宮をも思ひきこえじ、女をもうしと思はじ、ただわがありさまの世づかぬ怠りぞなど、なめ入りたまふ時々多かり。

(新編日本古典文学全集「蜻蛉」卷一六一頁)

浮舟を匂宮に奪われ、果てはその浮舟に先立たれた薰が、過往を振り返りつつ、己の至らなさを噛み締めているくだり。傍線部「らうたかりし人」とは浮舟のことだが、新編日本古典文学全集は、「人を。」と句点を付し、「まったくいといし女だったものを。」と訳出している。ここには、直前の「~と思ひしには」が掛かっており、

また、直後の「思ひもていけば」は「宮をも」に繋がつてゆくので、やはり「を。」と切らなければ文脈が捻れてしまうだろう。右の訳は、格助詞とも接続助詞とも詠嘆終止ともつかぬ形で、「を」の風合をうまく表している。が、「重りか」から「怠りぞ」までを鉤括弧に入れて訳している点は、頗けない。この段全体は、次のような陰陽周期で紡がれていると曰されるのである。

【R】^①「秋の葉に露ふきむすぶ秋風もゆふべぞきて身にはしみける」とかきてもそへまほしく^②おぼせと、「さやうなる露ばか

りの氣しきにてももりたらば、いとわづらはしげなるよなれば、^③はかなきことも、えほのめかしいづまじ。」かくよろづに「な^④にやかや」ともの思のはては、「むかしの人のものし給はまし^⑤かば、いかにも／＼ほかざまに心わけましや。ときのみかどの御むすめを給とも、えたてまつらざらまし。」^⑥また、「さ思人あり」ときこしめしなからば、かゝることもなからましを、なほ心うく、わが心みだり給けるはしひめかな^⑦と思ひあまりては、又、宮のうへにとりかゝりて、「こひしうもつらもわりなきことも、おこがましまきまで^⑧くやしき。」これに思ひびてさしつきには、「あさましくてうせにし人の、いとをさなく、^⑨とゞこほるところなかりけるかるべくしさ」をはおもひながら、「さすがにいみじとものおもひいりけんほど、わがけしきれいならすと心のおいゝなげきしづみてあたりけんありさま」をきゝ給しもおもひいでられつゝ、「をもりかなるかたならで、たゞ心やすくらうたきかたらひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を…」^⑩おもひもていけば、「宮をもおもひきこえじ。女をもうしとおもはじ。たゞわがありさまのよづ

かぬをこたりぞ」などながめいり給ときぐ／おばかり。

(大島本「蜻蛉」卷 五五〇～五六〇)

暴挙であると承知の上で、心内文は全て鉤括弧に入れ(①～⑩)、地の文はゴシック体にした。「重傍線部はいわゆる「主觀直叙」もしくは「うつり詞」の類で、「～と思す」と言い換え得るもの。この段全体の連綴法を見やすくするため、甚だ奇矯な体裁となつていることを諒とされたい。

新編日本古典文学全集の現代語訳は、④「むかしの～はしひめかな」と、⑨「をもりか」から⑩「をこたりぞ」までとを鉤括弧に入れ、他は、地の文(と薫の心内が半ば一体化したもの)として処理している。しかし、右のように色分けすると、この段全体が、薫の心内文(鉤括弧内)と、「思ふ」「思す」をくり返す地の文(ゴシック体)との交互反復によって彩なされていることが看取されるに違いない。実はこの前にも「といみじうおぼいたり」(五四〇)とあり、この後にも「また、おぼすまゝに」(五六〇)とあって、つまり、とめどない薫の煩悶が、「aと思い、bと思つてはまた、cと思ひ…」という形で蜿蜒と連なつてゐるのである。いかにも薫らしい、執拗に繰り返す思考がよく表された文体と思われるわけだが、問題の傍線部についていと、「～人を…」は、心内文の末尾、「おもひもていけば」は、「と思ひあまりては」「これに思ひびてさしつきには」などと同じく、心内文の狭間に、表出する地の文、と解することができよう。そして、その「らうたかりし人を…」といふ思念を打ち消すものとして、⑩「女(浮舟)をもうしとおもはじ」という言があるのでとすれば、「人を」の下には「うし」に相当するような述語用言が想定できることとなり、「を」は、先の

【〇】のことく、いい差しの格助詞と認め得るだらうか。なお判断としない。さらなる検観を要する。

以上、平安和文の氣脈をどのように捉えるかという課題のもと、「源氏物語」の会話文・心内文を取り挙げ、その内外に現れる助詞「を」に留意しつつ、新たな本文読解を試みた次第である。考慮の足りぬ点について、教示をいただければ、と思う。

注
(1) 萩原広道「源氏物語訳解」(一八五四年)

佐伯梅友「源氏物語講読」上～下(武藏野書院・一九九一～九二年)

(2) 島津久基「対訳源氏物語講話6」(矢島書房・一九五〇年)

(3) 体言接続の「を」を詠嘆として訳す諸例については、以下の論稿を参照。

松尾聰「格助詞・間投助詞・接続助詞の「を」」(『古典解釈のための国文法入門』改訂増補)研究社・一九七三年)

遠藤和夫「白露の色はひとつを一體言接続の「接続助詞」の「を」の用法を検討し、接続助詞の本質におよぶ」(『和洋女子大学紀要』(第1分冊 文系編)26・一九八六年三月)

(4) 次の論稿は、当該のくだりに触れながら独自の藤壺論を展開している。

阿部秋生「藤壺の宮と光源氏」1～2(『文学』一九八九年八～九月)

(5) 以下の諸例のうち、「重傍線部はいわゆる「主觀直叙」もしくは「うつり詞」の類で、「～と思す」と言い換え得るもの。この御ことにふれたることをば、だうりをもうしなはせ給ふ

(大島本「桐壺」卷 一五〇)

○さらぬはかなき事をだにきずをもとむる世に、
(大島本「紅葉賀」卷 一六〇)

- たゞそこはかとなくすぐしるし月は、なにごとをか心をもな
やましけむ、
（大島本「明石」卷二七〇）
- なお、「～に對して」と解し得る「を」については、以下の論稿も参考。
山崎良幸「助詞」（『古典語の文法』武藏野書院・一九六六年）
鎌田良二「中古文における助詞「を」について—その解釈をめぐって—」（『甲南女子大學紀要』8・一九七二年三月）
同「助詞「を」について」（『田辺博士古稀記念 国語助詞動詞論』叢書・一九七九年）
山口明穂「客語意識」（『国語の論理—古代語から近代語へ—』東京大学出版会・一九八九年）
(6) 塚原鉄雄「挿入の修辞」（『国語構文の成分機構』新典社・一九九〇年）
- (7) いざれも、近藤泰弘『日本語記述文法の理論』（ひつじ書房・一九九〇年）に所収。
なお、これを承けた以下の論稿も参照。
金水敏「古典語の「ヲ」について」（『田義雄編「日本語の格をめぐって』くるしお出版・一九九三年）
衣畑智秀「上代語のヲ・モノヲ—その起源をめぐって—」（金水敏代表『平成14年度科学研究費基盤研究（C）（2）研究成果報告書』統合化された言語学・国語学用語集のための基礎的研究』二〇〇三年三月）
(8) 今泉忠義「形容詞性の語の尊敬表現—源氏物語の敬語法—」（『天理大学論究』16・一九五七年六月）
(9) 佐伯梅友「松風の巻の別離の場面」（『古文読解のための文法 下』三省堂・一九八八年）
(10) 連体句のかような問題については、例えば、次の論稿を参照。
今泉忠義「源氏物語の構文—連体的修飾語の用法—」（『国学院雑誌』一九六六年四月）
(11) 山口明穂「を」（『松村明編「日本文法大辞典』明治書院・一九七一年）
(12) 天理本（畔雲本）の様態と本文については、次の論稿を参照。
伊井春樹「耕雲本『源氏物語』薄雲巻の性格」（『源氏物語論とその研究世界』風間書房・一九〇〇二年）
(13) 7行目*「さ」は「ま（万）」の誤写だろう。8行目**「ながら

は」ではなく「ながらば」と解した。9行目***「はしひめ」と「はじめ」との異同があり注意される。
(14) 以下の論稿は、島津久基のいう「主觀直叙」「客觀的移用」、中島広足のいう「うつり詞」を紹介しながら、主内文と地の文が分かれ難く融合する独自の文体について考察している。
石田穂一「注釈についての「三」の提言」（『源氏物語放その他』笠間書院・一九八九年）
秋山虔「うつり詞」と「こと」（『むらさき』21・一九八四年七月）
池田節子「移り詞」（『別冊国文学』源氏物語事典）一九八九年五月）

※『源氏物語』諸本の本文は、以下の複製・影印に拠った。

▽各筆本（御物本）＝『御物各筆源氏』（貴重本刊行会）

▽陽本＝『陽明叢書国書篇 源氏物語』（思文閣出版）

▽大島本＝『大島本源氏物語』（角川書店）

▽明融本＝『東海大学蔵桃園文庫影印叢書 源氏物語（明融本）』（東海大学出版会）

▽博本＝『國立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書 文学篇 物語』（臨川書店）

▽保坂本＝『保坂本源氏物語』（おうふう）

▽天理本（畔雲本）＝『天理図書館善本叢書 源氏物語諸本集』（八木書店）

いずれも、掲出に際して、私に句読点・濁点・鉤括弧を施した。漢字・仮名表記はとのままである。なお、今回は、見せ消ち・補入・注記・句読など、書き入れの一切を無視し、本行本文のみを採用した。